

## 虫

「絃子ちゃん、ごめん。つい、調子に乗って猪突猛進するところだった。もうしない。本当にごめん」

一

八尾孝生は突如、虫について調べてみたいと思った。昆虫などの虫そのものは概して好まないが、言葉の中の虫はあれこれあって面白い。ものの順序として、広辞苑を引いて虫を探した。

【広辞苑】本草学で、人類・獣類・鳥類・魚介以外の小動物の総称。昆虫など。②その鳴き声を愛して聞く昆虫。鈴虫・松虫など。③蠕形動物の称、特に回虫。

④回虫などによって起こると考えられていた腹痛など。虫気痛の俗称。⑤潜在する意識。ある考えや感情を引き起こすもの。古くは心の中に考えや感情を引き起こす虫がいると考えていた。「ふさぎの虫」⑥癩癩。

⑦愛人。情夫。隠し男。⑧産気づいて起こる陣痛。⑨

## 折葉 沢居

アあることに熱中する人。「本の虫」イチよつとしたことにもすぐにそうなる人、あるいは、そうした性質の人をあざけつていう語。「弱虫」「泣き虫」

後期高齢者の仲間入りをした八尾孝生の半生を振り返ると、彼が浮気の虫を身中に飼っていたことは明らかである。八尾の場合、浮気の虫というより、好色の虫というほうが当たっているのかもしれないが、いずれにしても、そういう虫に身を蝕まれていたことに違いはない。高校生の頃、義理の叔母に臆面もなくモーションを掛けてはねつけられたこともある。

一九六〇年安保の年に大学を卒業してK県立高校に英語の教師として採用された八尾は就職の翌年、小林和子と恋愛結婚したが、結婚によっても浮気の虫を封じることは出来なかった。八尾が最初に赴任したのはK工業高校で生徒のほとんどが男子だったから、必然的に女性の教師はいなかった。女性職員といえば、事務職員と現業職員に比較的年を取った女子がいたほか、

保健室の養護教諭と図書館の司書だけが女子で、いくら八尾が好色の虫を飼っていても、虫の蠢く対象とはならなかった。在校する生徒は大半が男子生徒だと上述べたが、例外的にデザイン系の学科には女子生徒がいた。しかし流石に新任教師が浮気相手を探す対象軍団とはならなかった。就職した翌年八尾は木材工芸科一年生の学級担任になった。科の主任から早々とスカウトされたのだが、総勢二五名の小さなクラスで男子二〇名、女子五名の構成だった。木材工芸科はかつて大工を養成する学科として名を馳せていたが、時代の流れとともにプロダクトデザインを志向する方向に変わっていった。同校には他に工芸図案科という学科があり、テキスタイルや印刷など平面デザイン系の学科だったが、いわゆる学力の面では工芸図案科のほうがはるかに優れた生徒の集まる実績を誇っていた。工芸図案科もクラス二五名の構成で、八尾の持つ英語などの普通教科は五〇名合同で授業を行う慣例となっていた。教員の配置が個別に授業を行うほど整っていなかったためである。

初めて学級担任となった八尾は若さと実行力でクラスを生徒を引きつけていったが、コンプレックスを内に秘めた生徒たちの猜疑心も根強く、なかなか打ち解

けた関係を築き上げることが出来なかった。生徒たちが漸く心を開くようになったのは、クラスの渡辺という生徒が暴力沙汰に及んで、生徒指導上の処分を受ける事態となったとき、八尾が職員会議において身を挺して渡辺の擁護に努め、実質的な処分を回避することが出来たことからだった。徹底して生徒の側に立つ姿勢を貫いたことで、

「どうやら、先生は口先だけの男ではないんだな」という信頼を得ることが出来た様子だった。二五人という少人数学級だったから、一年生の夏休みの間に生徒全員の家庭訪問を行って父母たちからそれなりの理解を得たことも、学級運営の上でプラスとなった。

生徒が二年から三年に進級するとき、かつてスカウトを受けた木材工芸科の主任から

「三年次では生徒の就職問題もあるので学級担任を専門学科の教員に返していただきたい」

旨の意向打診があった。そのとき、八尾は「ひとたび学級担任となったからには、生徒が卒業するまで面倒を見るのが筋というものだ」

と主張して、担任返上をかたく拒否して担任の座に固執した。主任からは

「木材工芸科ではこれまで普通科教員に三年の学級担

任をお願いした実績はない」

と言われたが、八尾は他の機械科や電気科の例を挙げ  
頑としてこれを拒みとおした。主任は

「生徒指導上の責任を負うこと、また、生徒の就職先  
の開拓に努力することを条件として、卒業までの学級  
担任を依頼する」

と言つて矛を収めるのだが、八尾が卒業までのクラス  
担任に拘つたことが木材工芸科の教員からクラスの生  
徒たちが執拗で陰湿なしつぺ返しを受けたことを八尾  
は知らない。ともかく八尾は途中で転校した一人を除  
いて二四人となった木材工芸科の生徒たちが無事卒業  
したことを見届けて、その翌年、一九六五年四月全日  
制普通科の横浜M高校へ転任した。

## 二

八尾の身中に深く眠っていた浮気の虫が蠢き始めた  
のは彼がM高校へ転勤して三年ほど経過した頃のこと  
だった。この年M高校に着任した教員は五人ほどだつ  
たが、その中にN女子大を出た新卒新採用の田尾玉緒  
という家庭科の教員がいて、八尾の虫が騒いだ。玉緒  
は北陸育ちの色白な美人で、生徒や教員の多くがその

魅力の虜になった。年齢は奇しくも八尾が三年間クラ  
スを担任したK工業高校の木材工芸科の生徒たちと同  
じで、八尾は何がなし因縁めいたものを感じた。朝、  
横浜駅の根岸線ホームで彼女の来るのを待ち伏せして  
同じ電車に乗って山手まで同道する同輩もいた。その  
四〇に近い彼は

「私は田尾先生が好きだから」

と大びらに公言して憚らなかつたが、それ以上の行動  
を企むふうではなかつた。八尾はそういう陽動作戦に  
出ることはなく、密かに二人だけになるチャンスをう  
かがうのだった。

その機会は前触れもなく不意にやってきた。勤務を  
終えて八尾が校門を出ると、偶然目の前を玉緒が歩い  
ていたのだ。すぐ追いついて玉緒に声を掛ける。

「あ、田尾先生も今お帰りですか」

「あら、先生。今日はお早いのですね」

「ええ、珍しく生徒会も三派系の反戦高校生委員会の  
連中も何も言つてきませんでしたので、定時に学校を  
出ることが出来ました」

「生徒会顧問として先生は獅子奮迅の働きですね。時  
代の流れというのでしょうか。学園紛争の波が大学か  
ら高校へ降りてきているようですね。政治向きの話は

今ひとつ判りませんが、敏感な生徒たちが学校運営に疑問を持ち始めたように思われますね。複数の生徒たちが気づき出したとなるとなかなか簡単に済まないのでしょうか」

思わぬ方向に話が進んで、これはまたとないチャンスだと八尾が声を飲んだとき、不意に玉緒は石にけつまずいて身体のバランスを失った。よろけた拍子に放り出された玉緒のヒールがもの見事に折れている。

「どうやらこの靴はこのままでは使い物にならなくなったようですね。応急処置をしてすぐ靴屋さんへ行きましょう」

そう言つて八尾は茫然と立ち尽くしている玉緒を助けて駅へ急いだ。関内で降りて伊勢佐木町へ誘う。

「この辺りはよく知っていますから、近くの靴屋へご案内しましょう」

と言ひ、八尾の行きつけの靴屋を訪ねて件のヒールを見せると、店長は、ものがいい靴だから修理をすればまだ履ける、修理には少し時間がかかるが預からせてほしいと言ひ、繋ぎはどうするかと玉緒に尋ねるのだった。玉緒は店長の勧めに従つて壊れた靴を修繕に置き、新しいパンプスを買つて店を出た。

「験直しに軽く一杯やつていきましよう」という八尾

の提案に頷いて二人は八尾の行きつけとなつている「だるま寿司」の暖簾を分けた。ここはM高校の教員の多くが立ち寄る店で、八尾も着任直後の歓送迎会の後の流れで連れられてきてから、常連の仲間入りしている店だった。こうして二人の密かなつきあいが始まった。八尾が好ましく思ったことは玉緒がかなりの酒飲みだったことだ。もちろん、強いとか弱いとかが問題になるわけではないが、酒の媒介があればそれだけ親しさも増すというものだ。休日を利用して山梨の昇仙峡を訪れたり、千葉の九十九里へ出かけたしたり。当時の教員給与は薄給で財布の負担は重かつたが、八尾は塾の講師、家庭教師、翻訳など、小遣い稼ぎに精を出して何とか財布の補いに道をつけるのだった。密会を重ねた二人が男女の仲になるのにさほどの手間はかからなかつた。何度か逢瀬を重ねて年が改まつてすぐのこと、八尾は玉緒が身ごもつたことを知らされた。それなりに注意したはずだったが、適わずに妊娠という事態に陥つたことで八尾は途方に暮れた。

「このままだと転勤かな」

「このままなら退職だわ」

非常の事態に陥つたとき男の認識は甘いな、女のほうはずっとしっかりしていると、八尾は玉緒の判断に

舌を巻いた。二月に入つて八尾は玉緒から、お腹の子を流産したと告げられた。結果的に事なきを得たことになつたのだが、八尾は自分が何の覚悟も備えもなしに情事にうつつを抜かしてきたことを思い知らされた。そしてそういう事態を経てみると、八尾はもはや玉緒との仲を続けるわけにはいなくなり、折からM高校を吹き荒れた学園紛争の嵐の渦中であつて、收拾の責任の一端を負う形で人事異動の対象となつたことを奇貨として、H高校へ異動した。一九六九年四月のことであるが、この異動によつて二人の仲は自然消滅の道を辿つた。H高校へ異動した八尾はそこで妹尾操と出会つた。妹尾は八尾より三歳年長の国語の教師だったが、一年後同じ学年の担任団に所属して、生徒生活指導や学年会議などをおして次第に仲良くなつていった。

「先生はM高校で学園紛争の收拾に当たられてご苦労なさつたそうですね」

「ボクの場合は、まだ本格的な学園紛争には至らない前段闘争の段階でしたから、さほどのことはありませんでした。ボクがHへ来た後のほうが本格的紛争段階に入つて、皆さんとても苦労されたようです」

「何でも、無理難題を言ってくる生徒たちの中に入つ

て全面的に泥を被つたと聞いていますわ」

「それは一つの作戦でした。生徒会顧問は三人いるのですが、三人全員が傷を負つてしまうと、次に收拾の任に当たる先生がいなくなる心配がありました。そこで、生徒会顧問の主任の立場にあつたボクが生徒たちの前面に出て泥を被り、他の二人の先生を後のために温存する陣立てにしたわけです」

「お若いのに素晴らしい作戦を思ひついたものですね」

学年会議などの中で妹尾は八尾を臆面もなく賞賛し、八尾に対する好意を隠そうとしなかつた。学年業務で二人が連れ立って出張した帰りが遅い時間になつたので、八尾は久里浜まで妹尾を送つていった。暗い夜道にかかると、操はもう我慢が出来ないというふうには身を押しつけてきて八尾の唇を求めた。その積極的な振る舞いに押されて八尾がこれに応じたのが二人の仲を先に進めるきっかけとなつた。

「先生好き！」

小声だが、しっかりした語調だった。二人の仲はおおむね操が積極的に働きかけ、八尾がそれに応える形で一年半ほど続いたが、八尾に組合本部執行委員への出馬要請が来て、終止符を打つこととなつた。操にも夫

と二人の子どもがおおり、八尾にも妻と二人の子どもがいて、家庭を壊すほどの無理を重ねてまで続ける関係ではないためだった。

### 三

八尾級によつてK工業高校木材工芸科を卒業した二四名の生徒たちのその後の動静について、その情報を八尾のほうから積極的に集めることはしなかったが、何となく風の噂が届いて、誰がどこで何をしているか、八尾は七割方掌握している様子だった。年賀状のやりとりは毎年続いたが、それもいつしか間遠になり音信の途絶えた生徒も二、三名は出たりした。彼らが若手中堅でいた間はクラス会なども開かれなかったが、五〇歳を過ぎる頃から有志の会を開くようになっていった。

その以前、彼らが三〇歳を過ぎた頃のことだったが、クラスの中の一人松尾政志が同期の工芸図案科を卒業した神楽坂絃子と結婚することになった、ついでには八尾先生夫妻に仲人をお願いできないか、という話が八尾の許にもたらされた。神楽坂の父親は八尾がK工業高校に在勤していた当時、PTAの会長の任について

いたことがあつて、八尾もよく知っていた。絃子はなかなか聡明で快活な子どもだったと記憶している。八尾は七五歳を過ぎた今でも、クラスの生徒を出席簿順に暗誦することが出来る。新井・石井・石渡・板垣・今村・岩下・大塚・岸本・小菅・小林……。だが、同時に教えた工芸図案科の生徒の名前は松尾と夫婦になった神楽坂絃子以外、誰も覚えていない。何と現金なことかと苦笑するほかないのだった。

二人の結婚式は松尾家の両親が熱心に帰依した創価学会の慣例に従つて執り行われたが、絃子は結婚に際して

「政志さんと結婚するが、宗教については創価学会流を強制強要されるのはおことわりである」

旨を松尾の両親に確認した。両親もこのことは快く受け入れて

「なかなか一人前になれない政志のことをくれぐれもよろしく頼みます。政志は絃子さんと一緒になれて何と幸せな子だろう」

と言つて喜んだ。その言葉どおり、絃子はテキスタイル関係の自分の仕事を立派にこなす傍ら政志の面倒をみたばかりでなく、両親、特に九〇歳を超えて長生きした義母の看護や介護に骨惜しみをしなかった。

彼らが高校を卒業して就職したのは一九六四年のことで、東京オリンピックの年だったから、それなりに景気もよく活気もあって、大きくて著名な企業に就職する者が続出した。大手の百貨店がインテリア部門に進出し始めたこともあって、三越を筆頭に大丸・松屋・東横などのデパートに複数で採用されたりした。

「木材の連中があんな立派なところへ就職するなんて」

などとK工業高校の他の機械科、電気科、建築科などの同期生や先輩卒業生からやかまされたり、脅かされたりすることもあった。

松尾は卒業時に同級生の大家とともに大丸デパートに就職してインテリア部門に配属されたが、長続きせず、二年ほど後に、建築関係の先輩のつてを頼って建築のほうへ転身した。絃子は卒業と同時に横浜スカーフの關係会社に就職し一〇年余の後、友人とともにテキスタイル關係の会社を興して独立した。政志絃子の夫妻は家事も仕事も家計も絃子が主役を演じ、政志は絃子の掌の上で踊っている關係で成立していたが、無論絃子がすべてを牛耳っているわけではなく、十分政志を立てて円満な家庭を築いていた。絃子は政志の価値観に惚れ込んで共感し、その感性に敬意を抱いて

いたからである。二人の結婚の後、八尾との關係が特に深くなったわけでもなく、親しさが増したわけでもなかったが、何年か一度はお互いを自家に招いて心づくしの手料理をふるまい合つて旧交を温めたりした。八尾が定年退職を迎えたとき、八尾級のクラスの卒業生が八尾夫妻を飯山温泉に招いてお祝ひしたこともあった。半数を超える一五、六人が集まつて盛大な宴会となつた。折角の機会だからと、松山や大阪など遠隔の地から駆けつける者もいた。興に乗つた八尾が出席簿の暗誦を披露して拍手喝采となつたりした。：岸本・小菅・小林・笹尾・笹沼・佐野・鈴木・塚本・土屋・中嶋：

中には

「オレはあんた(八尾)のお陰で一生を棒に振つた、ただじゃ置かない」と電話で息巻いて凄んだ卒業生もいたが、八尾自身は何をもつて彼に恨まれるのか、さつぱり見当もつかず、首を傾げるばかりだった。このクラスのクラス会は彼らが定年期を迎えた頃から少しずつ活発になつたが、ただじゃ置かない、という卒業生を慮つて、有志の会として会を持つようになった。酒が入ると昔話に花が咲くが、八尾の知らないことが結構披露されて、その都度八尾は目を白黒させられた。

彼らが三年次から卒業後に掛けて専門学科の教職員からあれこれ嫌がらせを受けたりしたこともこの中で知ったことだった。

#### 四

神高教の本部執行部に入った八尾の浮気の虫はその後どう蠢いたか。多岐に亘る組合本部の仕事に圧倒されて虫が動き出す機会はなかなかやってこなかった。専従期間が残りわずかになった八尾は在籍のまま組合業務に携わることが出来るよう、県教育委員会と折衝し、週当たり二日計八時間ばかりの授業を持つこととなつて、一九七九年一〇月にH高校からF高校へ異動した。短期大学付属の看護学科高校である。普段は授業を午前中に集めて、それが終わるとさつさと組合本部に赴くのだが、看護科固有の問題もあつて組合が知恵を出さなければならぬことが起きると、八尾は看護科職員からあれこれ事情を聴取することもたびたびのこととなつた。あるとき、職員室の中の雑談で「エビちゃんもそろそろ四〇の太台に乗るのね」という教頭の一言が耳に入った。エビちゃんは看護科高校創設のとき県職員から転籍してきた職員で、真面

目で仕事熱心な独身女性である。

「そうか、エビちゃんも四〇歳になるというわけか」  
改めて八尾は認識し、どういうわけか、

「エビちゃんを靡かせてしまおう」

と思ひ立つた。虫の蠢動である。そうしたあるとき、F高校の職員親睦会が横浜駅近くで行われ、会が跳ねた後、私のところで飲み直さないこと？ とエビちゃんの海老尾正代が誘い、四、五人の男子教員が応じて八尾にも声がかかった。またとないチャンスが八尾に巡ってきたというわけだった。こうして八尾はその後も相模鉄道和田町駅近くのエビちゃん宅を訪れ密かな二人のつきあいが始まった。八尾は決して急がなかった。囲碁の手ほどきを試みるなど、ゆっくり時間を掛けて間の壁を少しずつ削いでいった。男女の関係になつた後、エビちゃんは口癖のように

「女は怖いよ」

と言つたが、八尾はその怖さを実感することもなく、円満な別れで二人の密な仲は終わりを迎えた。

「残念だけれど、私、もう孝生さんを受け入れることが出来なくなつたの。私の泉が枯れちゃつたんだもの」と、閉経期を迎えたエビちゃんは言うのだった。



松尾政志が突然歩行困難を自覚するようになったのは彼が六四歳の誕生日を過ぎた頃のことだった。長年の趣味となっているランドナー(自転車)の遠乗りでK高校以来の友人大塚と山中湖まで走った帰りのことだった。道志川沿いの国道四一三号線から県道六四号線に入り、宮ヶ瀬湖にかかる虹の大橋を渡ってビクターセンターで小休止した後愛用のランドナーに跨がったとき腰に何とも言えない妙な違和感を感じたのだ。久しぶりに遠乗りしたからな、と自分を納得させながらそのまま、相模鉄道三ツ境駅前で大塚と別れて、横浜弘明寺の自宅へ帰った。政志は腰の違和感を忘れようとしたのだが、妙にいつまでも意識にまとわりつく。そうして間もなく歩くことがとても困難になるのだった。

政志はいくつか著名な病院を回って診察を受け、最後に横浜市大病院でパーキンソン病だと診断された。医者の処方方でドーパミンを補う薬を飲み、運動療法なども試みたが、ほとんど症状は改善しなかった。こうした経過の上で主治医もさらに綿密な検査を続け、漸くステイツマン症候群だとの診断に至ったのだった。全身の筋肉が徐々に硬直するこの病気に対する根本的な治療法は確立されておらず、痛みを和らげるな

どの対症療法以上の治療を受けることは出来なかった。政志は二年半ほどの闘病生活の末六八歳でこの世を去った。最後は障害一級、介護保険要介護度五の身となっていた。移動はもちろん車椅子だった。

絃子は政志が百万人に一人という難病に取り付かれたとき、一切の外の仕事を打ち切って政志の看病と介護に当たった。政志は医者への勧めで胃瘻の手術も受けしたが、食べ物最後まで経口摂取で、経管することはなかった。どんな食べ物もとろとろになるまですり下ろして流動食としたが、それはすべて絃子の仕事だった。甲斐甲斐しく献身的な仕事だったので、政志が他界したとき絃子はすっかりやり尽くした達成感を覚えるほどだった。

政志の葬儀は創価学会流の友人葬だった。八尾にも内々の知らせがあつて夫妻で参列したが、K工業高校の同級生は四人しか列席しなかった。控えめの家族葬に留めたためである。学会葬では故人は本名のままでご本尊となり、戒名のつかないのが八尾には新鮮だった。

通夜と告別式の読経を聞きながら、八尾は自然に心の中で出席簿を読み上げていた。：塚本・土屋・中嶋・中林・服部・二見・細川・松尾・松山・渡辺。脈絡も

なく、かつての生徒たちのあれこれが思い出される流れの中で、そう言えば、あの連中も結構仕事の虫で、最初から最後までその道一筋を貫く者も多かったことに思いを馳せている。新井は松下電器、板垣は木工業、今村はコーセー化粧品、大塚は大丸、岸本はシチズン、小菅は建築、小林は三越、笹尾は木工業、鈴木はジューキーミン、土屋は関東自動車、中嶋は父親の後を襲って日本画、服部はキャノン、二見は三越、細川はビクターなど、数えてみると半数以上になっている。

「先生、今日は遠いところを奥様も一緒に越えただけ、本当にありがとうございます。松尾もさぞ喜んでいいると思います」

「政治君は最後まで未完の器でしたね、大器とまでは言い切れないけれど」

「いつまで経っても子どもで、先生の仰るとおりでしたわ。それに松尾は結構八方美人というところがありません」

「そうでしたか。ボクは彼から『先生といえども、幹事の顔を立ててもらわねば』なんて、凄まじいこともあって、ちよつと愉快な思いもあります。それにしても紘子さんはよく頑張りましたね。さぞ疲れたことでしょう、ご苦労さまでした。お義母さんの看病と介

護の間も置かなかつたのではありませんか」

「でも五年くらいの間はありましたし、あのときは松尾もよくやつてくれましたから」

「政治君の難病は結局何年ほどでしたか」

「二年半ほどでしたが、その間、先生には何度もお電話をいただきありがとうございます。松尾も喜んでおりましたわ」

「ときどきふと思ひ出すと、政治君はどうしているかなと思つてね。それにしても紘子さんはよく頑張りましたね」

「最後は食欲がなくなつて何も食べられなくなりました。ああ、寿命が尽きるとはこういうことなのか、と思ひました」

先生、落ち着いたら一度お酒をつきあつて下さい、最後に紘子はそう小声で言い、八尾の許を離れて他の弔問客の接待に向かうのだった。

## 五

政治の葬儀から半年ほどが経ち、そろそろ紘子に酒の口を掛けてみようかと考えていた八尾に、ちよつとお話しがと妻の和子が声を掛けた。

「何だい、改まった顔をして」

「あなた、また、毒牙に掛けようと密かに狙っている人がいるでしょ」

「藪から棒に、また、とか、毒牙に掛けるとか、とは穏やかじゃない話だな」

「あら、私が田尾玉緒のことや妹尾操、海老尾正代のことを知らないとも思っているのですか。すべて承知の上のことで知らん顔を通してきたのですわ。どうして知ったか、教えましようか。田尾のときはあなたの寝言がきつかけです。あなたが寝言で『玉緒』と言うのを聞いてはじめは何のことか判りませんでした。

丁度そんなとき、当時お向かいだったMさんの奥さんが『あなたのご主人が三ツ境駅前を若い美人の人とにごやかに歩いているところを見ましたのよ、あなた、気をつけたほうがいいわ』と教えてくれたんです。それでちよつと調べてみたら、同じ学校に田尾玉緒のいるのが判ってこれだと合点がいったわけ。もちろん驚いたし腹も立ちました。でも、そこで下手に騒いだら却ってあなたを向こうに追いやってしまつて、家庭が崩壊すると思ひましたから、必死で堪えたんです。息子の大樹もやつと小学校に上がるかという時期でしたし。妹尾操のときはH高校の同僚という先生から教え

ていたきました。海老尾正代のときはF高校の卒業生の方から電話をもらいました。情けなくてまともに返事も出来ませんでしたわ。何という女誑し、今度こそこちらから三行半を突きつけようかと思ひました。でも、娘の素子が中学生になったばかり、多感な時期でしたので、結局ここでも我慢することにしたのですわ」

「そう言われると一言もないね。脱帽だが、もう済んだことだ。そんな昔のことを…」

「だから、昔のことをとやかく言うつもりではありませんわ。問題は今のことです。あなたは密かに絃子さんに手を出そうとしているんじゃないか」

「そんな、冗談じゃない。そんなことをしたらなくなった政志君に顔向けできないじゃないか。新井・石井・石渡…の二四人、(今では二人になつてゐるが)の批判や怨嗟の集中砲火を浴びることもなるわけだし、夢にも考えていないさ」

「それは本当のことでしょうね。もう何年もしないうちに八〇歳になる年なんだから、浮気の虫は起こさないようにしてくださいね。それに、絃子さんはあなたにとつては教え子の一人でしょうが、私にとつても大事な友人なんですから。あなたが私の友人と情を交わ

すなどということは絶対許しませんことよ。そんなことになったら今度こそ、躊躇なく熟年離婚に踏み切ります。今なら大樹も素子も私の味方ですからね。この家を出て行くのはわたしではなくてあなたですよ」

八尾孝生は、口癖のように『女は怖い』と言っているようにエビちゃんの顔を久しぶりに思い出し、虫はもう卒業だと思った。

「絺子ちゃん、ごめん。つい、調子に乗って猪突猛進するところだった。もうしない。本当にごめん」

(初稿二〇一三年一〇月一〇日)